

ずいそう

「土里居夢」シリーズ 第二弾 憧れのツリーハウスをセルフビルド

横澤 圭一郎



実は、5年前の2016年に「私のガーデニング（土里居夢園）」というタイトルで投稿した。今回は、私の信念である土に足をつけて里山に居ながら自給自足の生活をする夢、つまり「土里居夢」シリーズの第二弾として、以前からの憧れだった私のガーデンにある大木にツリーハウスを自分で作り上げた（セルフビルド）ことについて投稿する。

16年前に一目で気に入って購入した1,200坪の畑の中には、いろんな木々が既に林立していた。その中の1本に、幹の周囲3m、高さ約25mに成長した楠木が天に向かって聳え立っていた。まさしく存在感のあるシンボルツリーである（写真-1）。見た瞬間に、この楠木に何時かツリーハウスを作りたいという夢を抱いたのである。



写真-1 シンボルツリーの楠木

その夢が現実味を帯びてきたのは、私の友人の材木店が閉店することになり、在庫の材木を処分したいので、無償で提供してくれるという話が舞い込んで来たことから始まった。軽トラ4台分の材木は、いろんな種類があり、私の描いているツリーハウスを作るには十分な材料であった。

ツリーハウスの建築は、4年前の2017年5月から始め、8月のお盆前までには完成させる計画で作業を進めていった。それは、千葉にいる孫がお盆休みに帰省するまでに作ろうという単純な理由に過ぎなかった。この時には、まだ仕事をしていたので、農業とガーデニングを継続しながらツリーハウスを作るとなる

と、作業をやる日は土日しかなかった。

設計図などは描かずに、ただ楠木の形状を見ながらあとは感性で作るしかない。作るための条件としては、①柱となる材木の長さが最大で4mであること、②台風のような強風にも十分耐えることができること、③楠木の高さ約6m横から出ている頑丈な枝に床の桁を乗せること、④できるだけ広い空間を確保して屋根を付けることである。

当然、私1人で作業は行う（セルフビルド）しなく、6mの高い箇所（屋根を葺く作業は8m以上）の作業を妻が手伝ってくれるはずがない。逆に、妻からは「また病気が始まった」と言わんばかりで、あきれたような態度で無視されたことを覚えている。

まず、ツリーハウスを建築するため最初に始めた作業は、長さ4mの4本の柱を鉛直に建てた。それから、お互いの柱を繋ぐ水平材と筋交いを組み合わせて直径が1m以上ある楠木の太い幹の周りに抱かせるようにして土台を据え付けた。こうすることで楠木と土台が一体となり、頑丈な構造が出来上がった（写真-2）。また、柱に梯子の機能を持たせることで、高さ4m以上の作業をするための足場として利用することにした。

4mの高さまで辿り着いたら、次は、楠木の幹が2本に分かれたり、数箇所から水平に出ている枝を利用して、床を設置する6mの高さにある横に伸びた直径約50cmの枝まで辿り着かなければならない。そのためには、最終的にツリーハウスにどのようにして



写真-2 楠木と土台が一体

辿り着くかをいろいろ模索した。例えば、階段で登る方法、梯子で登る方法、ロープで登る方法などである。しかし、それでは、物理的に辿り着くのは難しく、誰でも登ることができないことや安全とは言えないのではないかということで、閃いたのが近くにあるベランダから高さ4mのところの木橋を架けることだった。木橋は、不要になった梯子を利用し、その梯子を補強して楠木の4mの高さに架けるようにした(写真—3)。辿り着く木橋ができた段階で、資材を運ぶことができるようになったので、今までよりは、作業の効率が良くなった。木橋から上の2m分は、楠木の枝を利用して階段を作ってハウスに辿り着くことにした。



写真—3 土台にかけた木橋と床用の桁

作り始めてから約2か月、いよいよ床の桁を設置する作業となる。6mの高さの作業は、まさにとび職、材木を上げることも重労働であった(写真—3)。また、桁の設置は、現場合わせで行うしかなく、水平や鉛直を見るのは、長さ30cmの水準器のみで行った。

このようにして最大の難関をクリアし、床面積3m×3mの桁の設置が完成した。その床には楠木の幹が突き抜けている。屋根まで行くとその幹がさらに2つに分かれているので、屋根には2つの穴が開いていて幹が突き出ているような状態になっている。これで、完全に楠木とツリーハウスが一体になった(写真—4)。このツリーハウスは、楠木が倒れない限り、倒壊することはないはずである。

床ができると、足場も広がって下が見えないので、ハウスの柱を立てて屋根を葺くのは、高所で作業している感覚はなかった。このツリーハウスは、前にも話したように、材木は無償で提供してもらったので、釘ねじ代位でほとんど費用が掛かっていない。ただ、唯一お金が掛かったのは、屋根材として購入した杉皮である。これは、ツリーハウスのイメージに拘っ



写真—4 屋根に登る開口部と2本の楠木

て杉皮にしたかったためであるが、出来上がった後に気が付いたことは、屋根の位置が地上から約8mの高さにあるので、地上からは全然見ることができないという空しい現実であった。悔しいので屋根に登り、杉皮の屋根を1人で見て思いに慕っていた。

屋根に登るのは、外側から登れないために1箇所楠木の幹の近くの屋根に50cm角の穴をあけて、そこから昇り降りをするようにした(写真—4)。本当に屋根から眺める景色は、伊豆半島や駿河湾を一望でき解放感を味わうことができた。

屋根ができた後は、風通しが良くなることとハウスになるべく風が当たらないようにするため、腰壁だけにして壁や窓を作るのを取返して辞めた。腰壁ができるとほぼハウスは完成である(写真—5)。



写真—5 完成した腰壁

しかし、地上に立っているハウスとの違いに気が付いたのは、床下面に吹き上げた風が当たるということで、その対策として、楠木の枝と桁をベルトで締め付けて下からの風に耐えるようにした。

最後に、腰壁や木橋と階段にペンキを塗って約9m²の広さのツリーハウスが完成した。このツリーハウスは、土里居夢シリーズとして「土里居夢庵」と



写真-6 完成したツリーハウスに立つ筆者



写真-7 ハンモックに腰掛ける孫たち

命名した（写真-6）。

完成後は、ツリーハウスの噂を聞きつけ、興味ある人や登りたい人などいろんな人が見に来た。もちろん孫たちもツリーハウスに取り付けたハンモックに座ったり、寝転んだり、外を見て喜んでくれた（写真-7）。私も農作業やガーデニングの合間にハンモックで昼寝をしているが、特に夏の暑い時は、ツリーハウスで寝ると涼しい風が吹いてぐっすり眠れ、まさしく天国にいるような夢心地になるのである。ただ1つ問題なのは、ハウスが腰壁だけなので、風通しが良すぎて冬の寒い時期には昼寝ができないということである。

また、大型の台風が来た時には、やはり心配でツリー

ハウスを見守っていた。しかし、この楠木は、風速30 m/sの暴風雨でも枝は大きく揺れていたにもかかわらず、幹はびくともしなかった。当然、ツリーハウスも無事で、何もなかったように楠木に抱き添っていた。

このように、夢に見たツリーハウスをセルフビルドで完成させた時には、想像以上の出来栄に、満足感と達成感を味わうことができた。これは、私の人生の1ページとして心に残る思い出である。

—よこざわ けいいちろう
（一社）日本建設機械施工協会 施工技術総合研究所 技術顧問—